

お寺・神社への参拝動機と死生観について —性差に注目して—

三宅 義和

1. 目的

伊勢神宮への参拝客は2007年以降増え続け、両宮合わせ2013年と2014年は二年連続で1000万人を超えた¹⁾。また、今日の興味深い現象として、御朱印をもらうため神社仏閣を訪れる「御朱印ガール」と呼ばれる女性が増えつつあることだ。これらの背景には、パワースポット、癒し、縁結びというキーワードに象徴されるように、ここ十数年前から続くスピリチュアル・ブームの影響が大きいと言わざるを得ない。しかし、その一方、普段の生活を無事平穀に過ごすことができる感謝の意を伝えるため、氏社や自分の好きなお寺に何度も参る者もいる。また、茂木²⁾は読売新聞社の医療サイト³⁾のコラムの中で、ジョギング中に心を整える⁴⁾という目的で神社参拝をしている、と記している。参拝は特定の宗教の信仰者による行為ではなく、普通の多くの人々によって行われるものであり、その動機もそれぞれ人によって異なっている。

日本人はよく無宗教であると言われるが、実はそうではない。このような言説がなされる場合、宗教はある教祖がいて特定の教義に基づいた教えという意味で、阿満（1996）の言葉を借りれば「独創宗教」の意味合いで使われている。が、日本人は古来より、自然を超越的な存在として捉え自然と共に共生してきた。自然崇拜のための儀式や習慣が日々の生活にも深く入り込み、人々はそれらの在り方について特に意識することもなく生きてきた。お寺や神社に参るという行為もそのような習慣の一つであり、我々が小さい頃から慣れ親しんできた行為である。日本人の無意識⁵⁾には、自然宗教的心性が宿っている。

人は生まれたら必ず死ぬ、これは自然の摂理である。何人にとってもいずれ自分の死について考えざるを得なくなる時が来るし、死とは何かという問いや、人間は必ず死ぬという事実を前提とした上で生にどのように向き合うべきかという問い合わせに迫られるようになる。これらの問いは一般的に死生観という言葉で表されるが、自然の摂理を前提として成り立つ死生観という概念は、日本人の場合、無意識に根づく自然信仰的なる心性に何らかの形で影響されていると言えるのではないだろうか。ここにお寺や神社へ参るという古からの習慣と死生観との関連を問う意味が見出されよう。

死生観に関する先行研究で、死生観は宗教、年代、性別、近親者の経験などの属性によって異

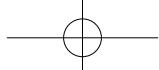
1) 伊勢神宮広報によれば、2014年は1086万5160人（内宮680万9288人、外宮405万5872人）、2013年は1420万4816人（内宮884万9738人、外宮535万5078人）であった。

2) 脳科学者の茂木健一郎。

3) <http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=122569>参照のこと（2015年10月27日確認）。

4) 茂木は前掲のサイトの中で、神社に行き手を合わせることで、忙しさゆえ忘れてしまっている原点を確認するための行為、それによりバラバラな心が再び一つになるイメージ、と述べている。

5) ユング、C. Gは、個人の無意識よりもさらに深い領域に、集団や民族、人類の心に関わる集合的無意識の存在を認めた。ここでは、集団や民族に関わる無意識層と理解されたい。



『神戸国際大学紀要』第89号

なることが明らかになっている（三宅,2014a）。2008年のISSP国際比較調査（宗教）によると、日本人の宗教別の割合は、無宗教が49%、仏教が34%、神道が3%、キリスト教が1%、その他の宗教が1%という結果であった。仏教以外の宗教はそもそも相対度数が少なく、比較的多い仏教といえども宗派やその下位宗派の数を入れるとかなりの数に上るので、それらを一括りにした分析が有効なのかという議論もある。そのあたりもふまえ、分析と検討を精密に行っている研究はほとんど見当たらない。それに対して、性別による分析と検討では、以下のような一定の知見が得られている。

女性の方が男性より強いのは「死後の世界観（死後の世界が存在するという確信の程度）」（丹下,1995、辰巳,2000、日渕,2011）、「死への恐怖・不安（死ぬことに対する恐怖感や不安感の程度）」（丹下,1995、辰巳,2000、田中ほか,2001、田中・岩本,2002、安藤,2004）、「解放としての死（死ぬことで生の苦しみから解放されるという意識の程度）」（日渕,2011）、「死からの回避（死あるいは死について考えることは避けたいという思いの程度）」（丹下,1995、田中ほか,2001、安藤,2004）、「死への関心（文字通り、死に対する関心の程度）」（田中・岩本,2002）、「寿命観（人の寿命は、偶然ではなくあらかじめ決まっているという確信の程度）」（田中ほか,2001、日渕,2011）、逆に、男性の方が女性よりも強い傾向があるのは、「人生における目的意識（生きている意味や人生の目的について意識の程度）」（片桐,2014）である。

上述してきたように死生観は性別で異なることが示されているが、同様に、神社仏閣への参拝動機と死生観との関係も異なるのではないか、その関係が性別でどのように異なるのかを明らかにすることを、本研究の目的とした。

2. 方法

調査は質問紙法によって行われた。調査対象者は主にA大学に通う2つの学部生232名⁶⁾、性別内の内訳は男性150名、女性82名であった（男性の平均年齢=23.9歳、女性の平均年齢=22.5歳）⁷⁾、データの収集は2014年7月と11月、2015年1月と7月に行われた。

[質問紙の構成]

(1) フェイスシート

性別、年齢、学科、神仏を信じているか否かとその程度、などの回答者の属性を問うものである。

(2) お寺に行く理由

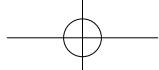
お寺に行くのはどのような理由からか、と尋ねた。10個の選択肢すなわち①「観光旅行のついでに行く」、②「願い事をするために」、③「初詣」、④「日々の感謝を伝えるため」、⑤「パワースポットであるから」、⑥「お墓参り」、⑦「有名なお寺であるから（一度は、訪れるべきだと思う）」、⑧「お守りを買うため」、⑨「おみくじをひくため」、⑩「その他」を設け、複数回答可で回答を求めた。

(3) 神社に行く理由

お寺とほぼ同様の回答形式を用いた。ただ、お寺に行く理由で設けた選択肢の一つ⑥「お墓参り」に代えて、⑥「お礼参り」を設けた。

6) この中には、学生ではないが授業の聴講を許可された社会人や高齢者なども含まれている。

7) 調査対象者の多くは20歳前後の学生であったが、社会人や高齢者などの受講者もある程度含まれていたため、このような数字となっている。



お寺・神社への参拝動機と死生観について－性差に注目して－

(4) 死生観尺度 (平井、2000)

平井ほか (2000) の死生観尺度を用いた。この尺度は27項目からなるが、すでに信頼性・妥当性などは確認されており、(平井ほか、2000)、以下の7つの下位因子から構成されている⁸⁾。

- ①死後の世界観：死後の世界が存在するという確信の程度
- ②死への恐怖・不安：死ぬことに対する恐怖感、不安感の程度
- ③解放としての死：死ぬことで生の苦しみから解放されるという意識の程度
- ④死からの回避：死あるいは死について考えることは避けたいという思いの程度
- ⑤人生における目的意識：生きている意味や人生の目的についての意識の程度
- ⑥死への関心：文字通り、死に対する関心の程度
- ⑦寿命観：人の寿命は、偶然ではなくあらかじめ決まっているという確信の程度

の7つである。

寿命観は3つの項目から成るが、他の6つは4つの項目から構成されている。この尺度の各項目について、「あてはまる」(7点)、「ほとんどあてはまる」(6点)、「少しあてはまる」(5点)、「どちらともいえない」(4点)、「あまりあてはまらない」(3点)、「ほとんどあてはまらない」(2点)、「まったくあてはまらない」(1点)の7件法で回答を求めた。因子得点は、それぞれの因子を構成する項目の素点を合計⁹⁾した。

[お寺・神社への参拝理由の分類方法]

まず、お寺であるが、⑨「その他」を除く9つの選択肢をいくつかのパターンに集約するため、数量化III類を行った。軸の数をいろいろ変えて解釈しづらい結果となつたために、③「初詣」、④「日々の感謝を伝えるため」、⑥「お墓参り」を除いて因子分析を行った。その結果、最終的に、以下の3つのパターン「観光目的」(①⑦)「心願成就」(②⑤)「参拝付隨行為」(⑧⑨)を得た。そして、ある方法(表1参照)に従ってそれぞれのパターンを「あり」と「なし」の二群に分けた。

次に神社である。先ほどのお寺と同様に⑨「その他」を除く、9つの選択肢について数量化III類を行った。軸の数をいろいろ変えてやはり解釈しづらい結果であったために、③「初詣」を除いて因子分析を行った。その結果、最終的に、以下の4つのパターン「観光目的」(①⑦)「心願成就」(②⑤)「参拝付隨行為」(⑧⑨)「謝意」(④⑥)を得た。そして、ある方法(表2参照)に従ってそれぞれのパターンを「あり」と「なし」の二群に分けた。

表1. お寺に行く各パターンの二群の分類方法

パターン	「あり」群	「なし」群
お寺観光目的	①と⑦を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	①と⑦のどちらも選択しなかった者
お寺心願成就	②と⑤を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	②と⑤のどちらも選択しなかった者
お寺参拝付隨行為	⑧と⑨を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	⑧と⑨のどちらも選択しなかった者

- 8) 今回の調査で得られたデータを因子分析(主因子法による)すると「死への恐怖・不安」を構成する4項目と「死からの回避」を構成する4項目が1つの因子として抽出された。6因子解で論を進める方法もあったが、この尺度はすでに信頼性・妥当性が得られているので、7因子解を採用しそれに従って(7つの)因子得点を求めた。
- 9) 因子得点の理論的範囲(最小値から最大値)を示すと、「寿命観」が3点~21点、他の6尺度は4点~28点となる。

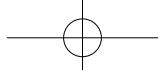


表2. 神社に行く各パターンの二群の分類方法

パターン	「あり」群	「なし」群
神社観光目的	①と⑦を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	①と⑦のどちらも選択しなかった者
神社心願成就	②と⑤を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	②と⑤のどちらも選択しなかった者
神社参拝付随行為	⑧と⑨を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	⑧と⑨のどちらも選択しなかった者
神社謝意	④と⑥を両方選択した者か、あるいはどちらかを選択した者	⑧と⑨のどちらも選択しなかった者

3. 結果

(1) お寺に行く理由 (図1参照)

その理由について複数回答可で回答を求めた。一番多い理由とその回答率は、③「初詣」の39.1%、次いで⑥「お墓参り」の30.4%、①「観光旅行のついでに行く」の28.7%であった。それに対し、②「願いごとをするために」が11.3%、④「日々の感謝を伝えるため」が3.5%、これらからしても、お寺にはさほど積極的な理由で行っているわけではないことがわかる。また、これらの回答率に性差があるかどうか検討するため χ^2 検定を行ったが、いずれの選択肢でも性差は見られなかった。

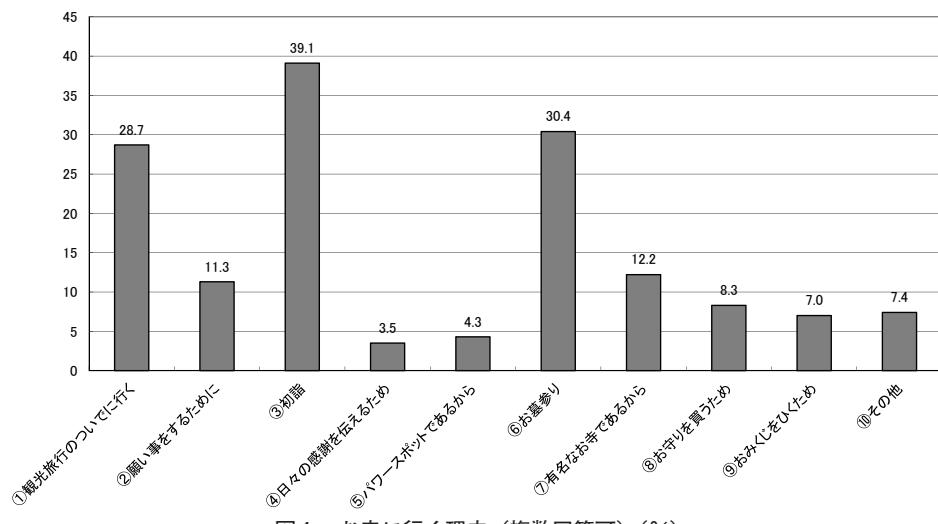
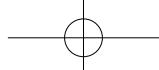


図1. お寺に行く理由 (複数回答可) (%)

(2) 神社に行く理由 (図2参照)

その理由について複数回答可で回答を求めた。一番多い理由とその回答率は、③「初詣」の64.8%、次いで①「観光旅行のついでに行く」の25.1%、②「願いごとをするために」の21.7%であった。それに対し、⑤「パワースポットであるから」が6.1%、④「日々の感謝を伝えるため」が4.3%。初詣には約3分の2の者が行くもののそれは年一回のことであり、それも含めて考えると、神社にもさほど積極的な理由で行っているわけではない。また、これらの回答率に性差があるかどうか検討するため χ^2 検定を行ったが、いずれの選択肢においても性差は見られなかった。



お寺・神社への参拝動機と死生観について－性差に注目して－

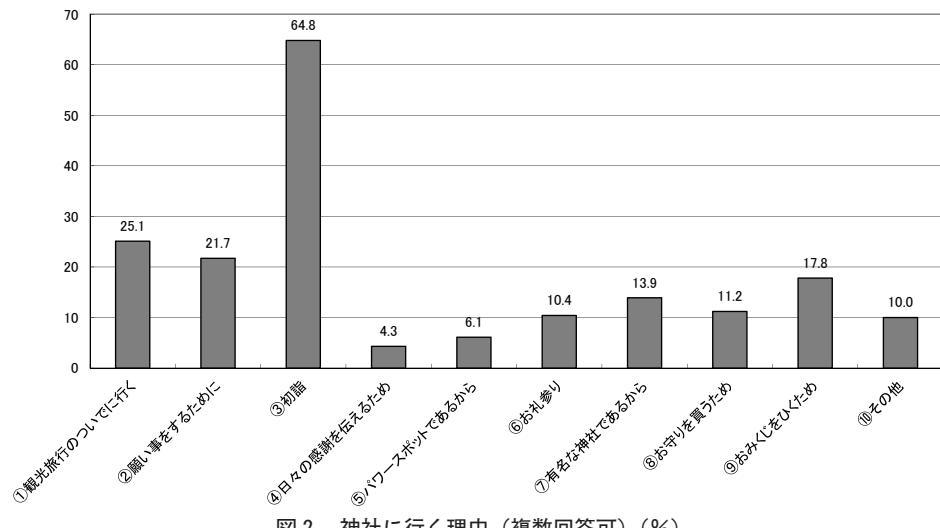


図2. 神社に行く理由 (複数回答可) (%)

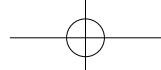
(3) お寺・神社に行く理由と死生観

お寺に参る理由の3つのパターンと神社に参る理由の4つのパターンのそれぞれの「あり」「なし」の二群別（表1、表2参照）に死生観の7つの得点の平均値を求めt検定を行った。そして、この処理を男女別に行った。

【男性】(表3参照)

まずお寺の方から見ると、お寺観光目的の「あり」は「なし」と比べて「人生における目的意識」がやや高く、その差は有意傾向 ($t = 1.820$, $df = 142$, $p < .10$) を示した。また、お寺心願成就の「あり」は「なし」と比べて「死後の世界観」が有意に ($t = 2.578$, $df = 142$, $p < .05$) 高かった。そして、お寺付随行為の「あり」と「なし」では、どの得点においても有意差は見られなかった。

次に神社。神社観光目的の「あり」は「なし」と比べて「死への不安・恐怖」がやや高く、その差は有意傾向 ($t = 1.778$, $df = 140$, $p < .10$) を示した。また、神社心願成就の「あり」は「なし」と比べて「死後の世界観」が有意に ($t = 2.616$, $df = 142$, $p < .05$) 高く、また「人生における目的意識」も有意に ($t = 2.938$, $df = 57.592$, $p < .01$) 高かった。神社付隨行為の「あり」は「なし」と比べて「死への不安と恐怖」が有意に高く ($t = 2.521$, $df = 140$, $p < .05$)、逆に「解放としての死」は有意に ($t = -2.562$, $df = 139$, $p < .05$) 低かった。そして、神社謝意の「あり」は「なし」と比べて「人生における目的意識」が有意に ($t = 2.111$, $df = 142$, $p < .05$) 高かった。



『神戸国際大学紀要』第89号

表3. 男性の参拝動機別の各死生観得点のt検定における有意確率

	死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	人生における目的意識	死への関心	寿命観
お寺観光目的	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	p<.10	n.s.	n.s.
お寺心願成就	p<.05	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
お寺参拝付隨行為	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
神社観光目的	n.s.	p<.10	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
神社心願成就	p<.05	n.s.	n.s.	n.s.	p<.01	n.s.	n.s.
神社参拝付隨行為	n.s.	p<.05	p<.05(注)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
神社謝意	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	p<.05	n.s.	p<.10

注) t値の算出においては、「あり」群から「なし」群を差し引いているが、神社参拝付隨行為の解放としての死は負の値となった。

【女性】(表4参照)

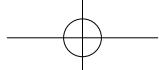
まず、お寺の方から見ると、お寺観光目的の「あり」は「なし」と比べて「解放としての死」が有意に ($t = 3.023$, $df = 78$, $p < .01$) 高かった。また、お寺心願成就の「あり」と「なし」では、どの得点においても有意差は見られなかった。そして、お寺付隨行為の「あり」は「なし」と比べて「死への不安と恐怖」がやや高く、その差は有意傾向 ($t = 1.992$, $df = 78$, $p < .10$) を示し、「死からの回避」は有意に ($t = 2.626$, $df = 79$, $p < .01$) 高かった。

次に神社。神社観光目的の「あり」は「なし」と比べて「解放としての死」がやや高く、その差は有意傾向 ($t = 1.839$, $df = 78$, $p < .10$) を示した。また、神社心願成就の「あり」と「なし」では、どの得点においても有意差は見られなかった。神社付隨行為の「あり」は、「なし」と比べて「死からの回避」がやや高く、その差は有意傾向 ($t = 1.696$, $df = 78$, $p < .10$) を示した。そして、神社謝意の「あり」は、「なし」と比べて「死への関心」が有意に ($t = 2.373$, $df = 79$, $p < .05$) 高かった。

表4. 女性の参拝動機別の各死生観得点のt検定における有意確率

	死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	人生における目的意識	死への関心	寿命観
お寺観光目的	n.s.	n.s.	p<.01	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
お寺心願成就	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
お寺参拝付隨行為	n.s.	p<.10	n.s.	p<.05	n.s.	n.s.	n.s.
神社観光目的	n.s.	n.s.	p<.10	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
神社心願成就	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
神社参拝付隨行為	n.s.	n.s.	n.s.	p<.10	n.s.	n.s.	n.s.
神社謝意	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	p<.01	n.s.

注) t値の算出においては、「あり」群から「なし」群を差し引いている。



4. 考察

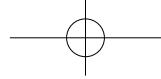
参拝理由は人によって異なるが、その理由において性差は見られなかった。ただ、その目的や理由別で死生観との関連について検討すると、男性と女性とでは大きく異なることがわかった。

男性に関する限り、心願成就や謝意が目的で神社に行く人は「人生の目的意識」が有意に高かった。つまり、自分の生きている意味を見出し、人生の目的を意識している人が、神社に行くとすればそれは心願成就のためであったり、その願いが叶ったことに対してお礼を言いに参いったりするということである。また、観光目的や参拝付随行為のために神社に行く人は「死への不安・恐怖」が強いという傾向が見られた。何気なく出かけ、おみくじをひいたりお守りを買ったりするのは、死の不安や恐怖を鎮めたいという心理があるのだろう。このような人の方が、死は人生という修業からの解放という考え方ではない。生に執着的であり、だからこそ死の不安や恐怖は耐え難いものであるので、おみくじやお守りを得る事でその気を紛らわせているようである。あと、お寺であれ神社であれ、心願成就を目的として参拝する人は、そうでない人と比べて「死後の世界観」が強い。生前のみならず死後の世界をも視野に入れた上で、自己実現を図ろうとした生き方を選んでいると考えられる。全体的にいいうならば、男性の場合、お寺や神社に行く人は、そうでない人と比べて、自分の願いを叶えることを人生の目的とし、来世をもふまえた視点で人生をとらえている。

女性の場合はどうだろうか。お寺に行くのも神社に行くのも付隨の行為のため（おみくじをひいたりお守りを買ったりするため）と考える人は「死からの回避」が強かった。また、お寺であれ神社であれ、観光目的で行く人は「解放としての死」が高かった。つまり、観光で行く人は、人生を修業ととらえ死を人生という苦しみからの解放と捉えている。そこには、単なる観光目的というのではなく、日々の生活における辛さや寂しさなどを癒すという目的があるのではないか。一般に、男性と比べると女性は死後の世界を信じている人が多いという知見が得られている。ただ、お寺や神社参拝の目的と死後の世界観との関連は見られなかった。このことから、女性がお寺や神社へ行くのは、日々の辛さや疲れへの癒しを求めていることが多く、それは未来を視野に入れた目標志向としてではない。その日の参拝を通じて心身共にリフレッシュし、そしてまたストレスフルな日常生活に備えるためではないか、と考えられる。

【引用文献・参考文献】

- 阿満利麿（1996）『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書
日渕淳子（2011）「中年期の時間的展望と死に対する意識の関連－時間的態度による年代別の検討－」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 第4巻第2号 123～128ページ
平井啓ほか（2000）「死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証」『死の臨床』第23巻、71～76ページ
井上順孝編著（2006）『神道』ナツメ社
片桐史恵（2014）「福祉系大学生の死生観及びその性差に関する調査－死生観尺度による検討－」中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 第15号、97～104ページ
松下千夏（2009）「青年期の死の不安と死生観－高齢者との比較から」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第31巻、103～123ページ
三宅義和（2014a）「死後生観の起源に関する一考察－生きる意味との関連から」『神戸国際大学経済文化研究所年報』第23巻、19～31ページ
三宅義和（2014b）「死生観の構造」近藤剛編『死と葬りを考える』ミネルヴァ書房
三宅義和（2015）「大学生のお寺・神社のイメージについて」『神戸国際大学経済文化研究所年報』第24巻、1～12ページ
西久美子（2009）「“宗教的なるもの”にひかれる日本人～ISSP国際比較調査（宗教）から～」放送研究と調査 5月号、66～81ページ



『神戸国際大学紀要』第89号

田中愛子ほか (2001) 「青年期及び壮年期の『死に関する意識』の比較研究」山口医学 第50巻、697～704
ページ

田中愛子・岩本普 (2002) 「老年期に焦点をあてた死生観・終末医療に関する意識調査」山口県立大学看護学
部紀要 第6巻、119～125ページ

辰巳有紀子 (2002) 「日本の高齢者における死の不安と死生観」聖心女子大学大学院論集 第22巻、105～120
ページ

丹下智香子 (1995) 「死生観の展開」名古屋大學教育學部紀要 第42巻、149～156ページ

【引用・参考サイト】

<http://nikkan-spa.jp/397937>

<http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=122569>

<http://www.nippon.com/ja/in-depth/a02901/>